

救援者の災害ストレス (PTSD, CIS) の予防とケアに関する臨床心理学的研究(Ⅱ)  
 ～CISとPTSDの関連に視点をあてて～

鹿児島純心女子大学大学院			餅原尚子
鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科M2			松田英里
同	上		成願めぐみ
同	上	M1	久木崎利香
同	上		有留香織
同	上		永田純子
同	上		坂元真紀
同	上		前原加奈
同	上		松元理恵子
鹿児島純心女子大学大学院			久留一郎

和文要旨

災害の体験によって直接の被災者だけでなく、救援者も大きな影響を受ける。海外での先行研究と同じく、わが国の救援者においても心的外傷性ストレス症状 (post-traumatic stress reaction) の割合が高いことが明らかになっている。救援者は災害現場に出場し、被災者と同じような体験をすることによるストレスを受けることになる。一方、職業的救援者であるがゆえに一般的な被災者とは別のストレス (災害出場を忌避できない。彼らには社会的な期待が大きい) に加え、特有の義務感、責任感や弱音を吐きにくい組織的風土が加わる。まして、箝口令が敷かれているとなおさらである。本研究では、消防職員、海上保安官、警察官、救急救命士が直面するCIS (Critical Incident Stress: 惨事ストレス)、PTSD (Posttraumatic Stress Disorder: 外傷後ストレス障害) の現状について分析し、ストレスの特徴を明らかにすることを目的とした。

アンケート調査を実施し、そのうち消防職員356名、海上保安官80名、警察官854名、救急救命士200名の有効回答を得ることができた。

CISについては、海上保安官や警察官よりも消防職員や救急救命士に高く認められた。さらに、警察官より消防職員や救急救命士が、PTSDの症状を呈しやすいことが明らかになった。

I. 問題

1. CIS

災害の救援に携わる人々は、仕事の上ではなにごともないように振る舞っているが、その誰もが、彼らが体験したことによる影響を受けている。強いショックを長時間にわたって抑圧し続けると、思わぬ時にそれがフラッシュバックとして表面化することがある。予期しないときに強い恐怖の感情に襲われると、さらにストレスは増加するのである。

救援者はその任務遂行上、凄惨な災害現場活動

に従事することで、悲惨さ、恐怖、もどかしさ、悔恨、後悔、悲しさ、無力感、罪悪感、自己嫌悪など、さまざまな感情を抱くことがあり、これがストレスとなり、トラウマとして遺ると考えられている。こうした状況下での心理的負荷をCISといい、身体、精神、情動又は行動に様々な障害の発生や、さらにはPTSDなどの重い状態を引き起こすことがあると言われる (総務省消防庁消防課, 2003)。

CISは、通常の対処行動機制がうまく働かないような問題や脅威 (惨事) に直面した人が、惨

事の様子を見聞きしたときに起こるストレス反応と定義される (Everly, et al., 2000)。

惨事の例としては、地震・洪水や水害・噴火・津波・台風などの自然災害や、交通事故・火災・ビルの倒壊・テロ・戦争などの人為的災害、事故、暴力・性被害・虐待などの暴力的行為などが含まれる (松井, 2005)

C I Sによる影響は人によって様々である。同じ災害を体験しても、その人の生活環境や経験等で現れる反応は同じこともあり、異なることもある。当人の主観的意味づけがその後の反応に大きく影響を与えているように思われる。筆者らの研究では、消防職員においては未婚者より既婚者の方がC I Sを感じやすいことが見出された (餅原ら, 2005)。

また、消防職員は災害活動に対して強い使命感と責任感をもっている。そのために活動が功を奏した場合の満足度は極めて高く、逆に使命を達成できなかった場合の失意は大きい。この失意もC I Sを発生させる大きな要因になるという (伊藤, 1999)。

## 2. C I Sの発生要因

総務省消防庁 (2003) によると、消防職員が災害現場で、重大な影響を受けるおそれのあるストレス要因として、次のようなものを挙げている。ここで注意しなければならないことは、必ずしも規模の大きな災害だけが悲惨であり、ショックが大きいとは限らないことである。

- ①悲惨、凄惨な場面での活動
- ②活動に困難性が伴い、命の危険を感じながらの救助活動
- ③未知の危険や、極度の不安、緊張感の伴う現場活動
- ④子どもの死など、自分の家族を想起させるような場面
- ⑤救出した人の死、救出できなかった場合 (無力感、罪悪感、自己嫌悪、責任感など)
- ⑥同僚の負傷、殉職が発生した場合 (いわゆる生き残り症候群や罪悪感など)

## ⑦トリアージの必要な現場活動

## ⑧衆人環視の中での困難な救助活動

また、伊藤 (1999) も、C I Sが起きる災害の例として、航空機の墜落や地震災害などの大規模災害、3人以上の死者が出た災害、同僚・知人の死亡事故、親子又は幼い子どもの無残な死亡事故、毒劇物、化学物質及び細菌等の曝露事故などをあげている。

Bryantら (1996) は、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の消防士を対象に調査を行い、消防活動の主なストレスは、状況に対する無能力感や疲労感にあり、自他の安全が脅かされる脅威が最大のストレスであるとして報告している。

総務省消防庁 (2003) によると、消防職員におけるC I Sの背景としては、

- ①消防職員として災害出場を忌避できない職業上の宿命
- ②消防職員への勇敢、献身的態度といった社会一般からの大きな期待
- ③社会の期待に応えなければならないと考える義務感や責任感などの職業意識
- ④伝統的に勇敢さを重んじ、弱音を吐くことをタブー視してきた組織的風土
- ⑤災害現場で受ける悲惨な体験や恐怖が、一人前の消防士になるプロセスの一つと捉えられてきた風潮

などが挙げられる。そのため、C I Sは個人的な苦悩として無視されやすく、仮に症状が出ていたにしても、正しく理解されていなかったために表面化しなかっただけであると思われる。C I Sを個人的な苦悩として無視したりすると、かえってストレス状態が悪化する危険性が大きくなる。

## II. 研究目的

本研究では、職業別の惨事時の気持ち (CIS) を比較し、PTSD症状との関連について明らかにすることを目的とする。

### III. 方法

#### 1. 対象

消防職員 (某市消防職員及び某県中級幹部) に対しては2003年6月、惨事ストレスに関する研修会開催前に、参加者全員に配付し、その場で回収した。某海上保安本部海上保安官 (特殊救難隊：危険物積載船の火災などの救助をはじめ、転覆船や沈没船内からの人名救出、ヘリコプターから降下しての避難者の救助など高度で専門的な知識技能を必要とする救難業務を任務とする者) に対しては2003年11月、某市勤務の警察官には2005年8月、某県救急救命士会会員 (有資格者のみ。ただし、消防職員対象の調査で同アンケートを記入した者は除く) に対しては2005年8月に、いずれも管理職を通してアンケート調査を実施し、回収後はそのままトラウマ・ケアの専門家 (筆者ら) へ渡されるという条件で依頼をしてもらった (個人の情報が職場内に漏れることのないよう配慮した)。いずれも無記名による回答である。有効回答数 (惨事体験者)、性別、既婚・未婚の有無を表1に示す (消防職員の中には救急救命士も含まれるが、消防職員の場合は、「消防-救助-救急」のローテーションを組むということから、救急救命士と分けて調査し、分析を行った。無解答は除く)。

表1 有効回答数

対象者	有効回答数(人数)	男性	女性	既婚	未婚
消防職員	356名	98.3%	0.3%	80.9%	14.0%
海上保安官	80名	95.0%	3.8%	75.0%	20.0%
警察官	854名	94.7%	3.4%	73.5%	18.7%
救急救命士	200名	99.5%	0.0%	88.5%	9.0%
合計	1490名	96.2%	2.2%	77.4%	16.4%

性別では、男性がほとんどであり、既婚者が77.4%であった (無記入は除く)。

平均年齢は表2の通りであり、40歳代前半が多かった。

表2 対象の平均年齢

対象者	平均年齢 (歳)
消防職員	42.3
海上保安官	43.1
警察官	41.6
救急救命士	39.8

内訳をみると、消防職員は50歳代が37.7%、40歳代が23.2%、次いで20歳代が21.0%、30歳代が18.1%であった。海上保安官は、40歳代が34.2%と最も多く、次いで50歳代31.6%、20歳代20.3%、30歳代13.9%であった。警察官は50歳代が32.2%、40歳代が26.6%、20歳代が22.5%、30歳代が18.0%であった。救急救命士では30歳代が40.7%と多く、次いで40歳代33.7%、50歳代15.1%、20歳代10.6%であった。

全体では、50歳代が31.2%、40歳代が27.2%、30歳代が20.8%、20歳代が20.4%であった。救援歴20年前後のベテラン者が多かった。

#### 2. アンケート項目

職種により、若干の表現を変えたが、内容はすべて統一した。

「惨事の状況」ならびに「惨事時の気持ち」については、加藤 (2001) の「災害救援者のチェックリスト」を引用した。また、「惨事後の気持ち」については、久留 (2004) の「PTSD: DSM-IV修正版」を引用した。

### IV. 結果と考察

#### 1. 惨事時の気持ち (CIS)

##### ①動揺した。とてもショックを受けた (図1)

全体をみると47.6%の者が動揺し、ショックを受けていた。

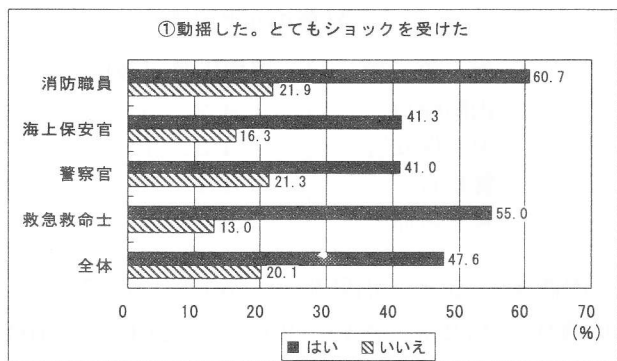


図 1

②精神的にとっても疲れた (図 2)

精神的疲労を最も強く感じたのが消防職員の 59.6%であった。凄惨な現場を目のあたりにしやすく、生死を左右する職種なだけに、精神的エネルギーを消耗しやすいことがうかがわれる。

東京消防庁が、阪神・淡路大震災に消防広域応援隊として早期に派遣された205名の職員に対し、帰庁して1ヶ月後に災害心理に関するアンケート調査を行った結果では、派遣職員の4人に一人(55名)は不安やいらだち、脱力感、疲労感などのストレス反応を自覚していた。その55名の中では、脱力感・疲労感が60%、不安が26%、いらだちが24%、注意力・集中力の減退が22%、習慣の変化が7%であった(伊藤, 1999)。今回の調査結果でも同じような疲労感がどの職種にも認められている。

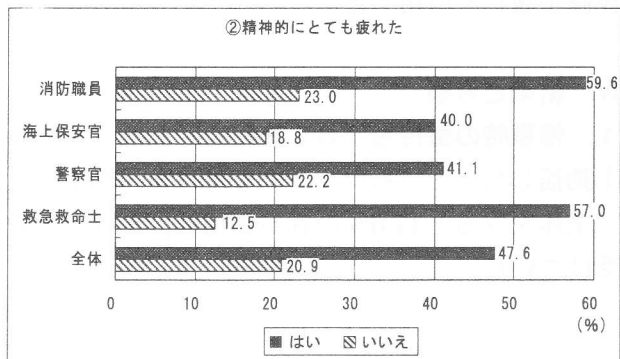


図 2

③被害に遭われた方の状況を自分のことのように感じてしまった (図 3)

自分と同一視した者は消防職員が55.3%と最も

多く、全体の平均も39.6%であった。

消防職員で同一視したのは、20歳代、30歳代の消防職員より、40歳代、50歳代のベテランの者に高く ( $p<0.05$ )、さらに救援歴6年以上の者に高く ( $p<0.05$ ) 認められた。さらに、未婚者より既婚者に高く ( $p<0.05$ ) みられた(餅原ら, 2005)。

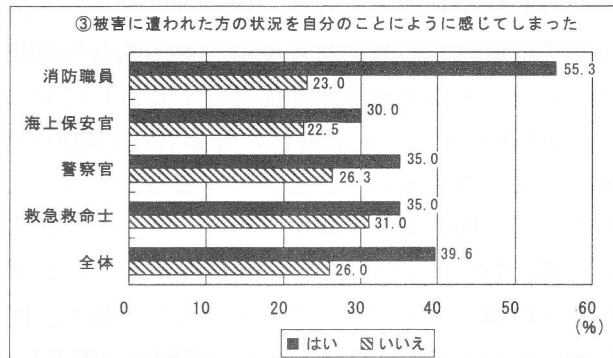


図 3

④誰にも体験や気持ちを話せなかった (図 4)

消防職員が12.6%と最も高かった。

消防職員については、20歳代よりも30歳以上の者が「話せなかった」と回答し ( $p<0.05$ )、また、5年以下の救援歴のある者よりも36年以上の救援歴をもつ者も同様に「話せなかった」 ( $p<0.05$ ) という結果がみられた(餅原ら, 2005)。ベテランだけに辛い気持ちを表明できない様相がうかがわれる。

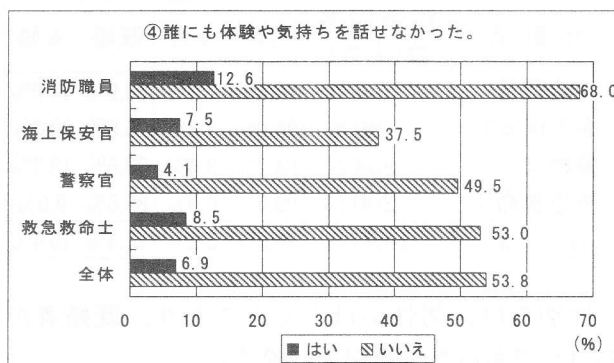


図 4

※話しても仕方がないと思った (図 5)

この項目は、警察官と救急救命士のみを実施し

た結果である。救急救命士は11.5%と警察官よりも高く、感情を抑制しやすいことがうかがわれる。

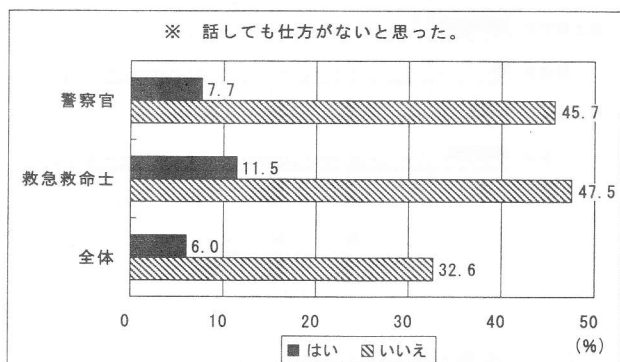


図5

⑤上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いた (図6)

怒りや不信感が最も高かったのは、海上保安官 (11.3%)、救急救命士 (10.0%) であった。

消防職員について、大水害 (34名) と工場爆発事故 (54名) とでこの項目について比較したところ、大水害の方が上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いていた ( $p < 0.05$ ) ことが示された。大水害は1990年代始めの頃であり、惨事ストレスという言葉すら周知されていない時代であったためであろう。

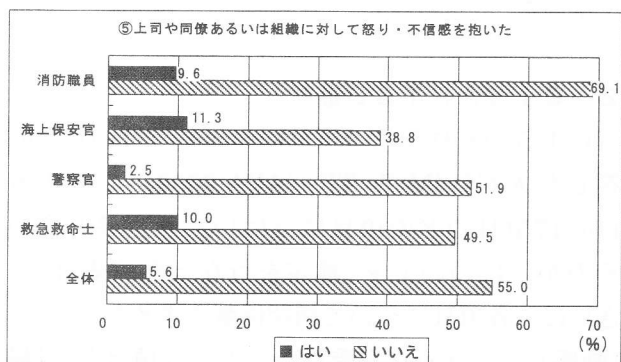


図6

⑥この仕事に就いたことを後悔した (図7)

後悔したものは消防職員、海上保安官、警察官は2%前後であるが、救急救命士は4.0%と高く、ストレスの高さをうかがわせる。

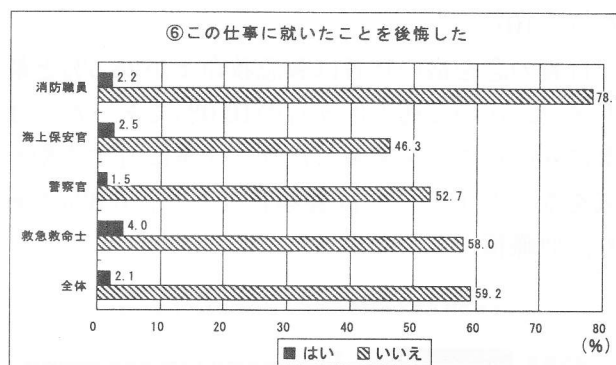


図7

⑦仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った (図8)

少ない割合ではあるが、消防職員が1.7%と他職種に比べ、若干高いことが認められた。

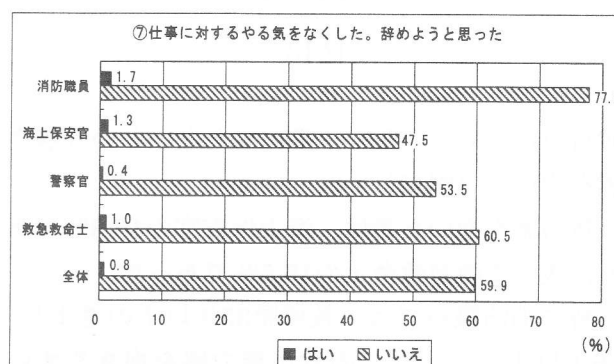


図8

⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった (図9)

全体的に少なく、平均1.9%程度であった。

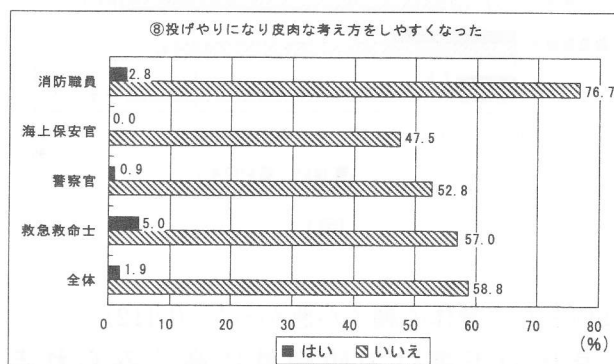


図9

⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまっ

た (図10)

自責の念を抱いた者は救急救命士が25.5%と最も多く、次いで海上保安官の10.0%であった。仕事に就いたことを後悔したり、仕事に対するやる気をなくしていたのは警察官であり、6.6%であり、他職種より少なかった。

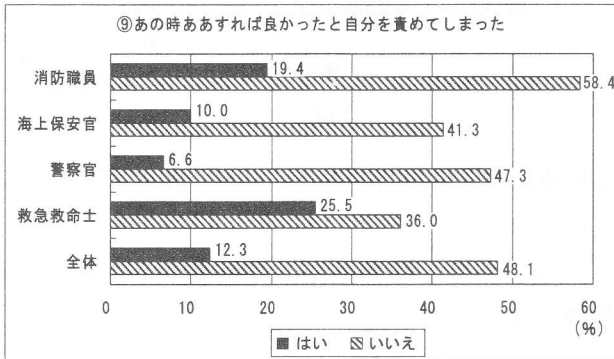


図10

⑩自分は何もできない、役に立たないという無力感を抱いた (図11)

無力感を抱いた者は、海上保安官の16.3%であり、次いで救急救命士の15.5%であった。

特に消防職員では、救援歴35年以下の者より、36年以上のベテランの者が無力感を抱きやすい ( $p < 0.05$ ) ことが認められた (餅原ら, 2005)。

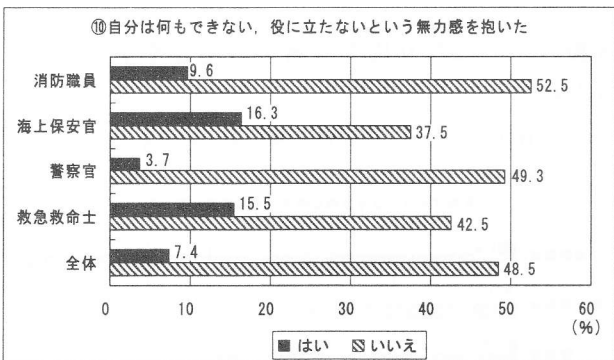


図11

⑪何となく身体の調子が悪かった (図12)

身体の不調は消防職員に高くみられる (21.9%) ことが見出された。

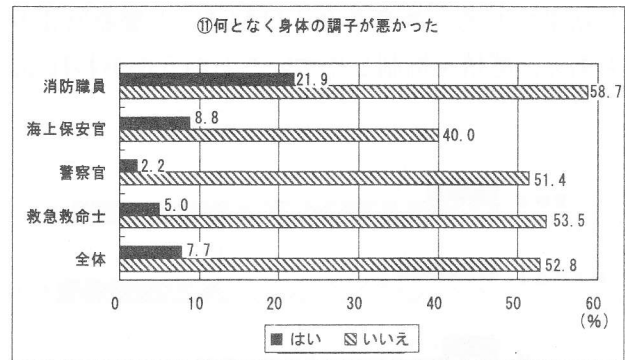


図12

以上、惨事時の気持ち (CIS) については、全職種の約5割がショックを受け、精神的疲労を感じていた。

職業別に比較してみると、特に消防職員は、他職種に比べ被害者と同一視しやすく、自責的になりやすく、身体の不調を訴えやすいことが見出された。海上保安官と救急救命士は他職種に比べ、上司や同僚や組織への怒り・不信感が強く、自分自身の無力感をつよく感じていた。また、救急救命士はこの仕事に就いたことを後悔したり、身体の不調を訴えやすいことが明らかになった。

一方、警察官は他職種に比べ、被害者へ同一視しやすいものの、組織への怒りや不信感、後悔、意欲の低下、無力感、身体の不調を訴える人は少なかった。

## 2. CISとPTSD症状

CISのそれぞれの項目について「はい」と回答した人がDSM-IV-TR (APA,2002) のPTSDの17項目のどの項目に「はい」と回答しているのか、について $\chi^2$ 検定を行なった (表3)。さらに、各項目について相関係数を求めたところ、「動揺し、ショックを受けた」という項目と、「繰り返し思い出された (N=920,  $r = .301$ )」「思い出させる物で心が痛んだ (N=911,  $r = .308$ )」「思い出すと胸がドキドキしたり緊張した (N=892,  $r = .301$ )」については、やや弱い相関がみられた。また、「精神的にとっても疲れた」と「繰り返し思い出された (N=933,  $r = .322$ )」も、弱い相関がみられた。「自分のことのように

感じた」も「繰り返し思い出された (N=895, r=.362)」「思い出させる物で心が痛んだ (N=902, r=.309)」とやや弱い相関がみられ、「誰にも話せなかった」も「話題にすることを避けた (N=881, r=.355)」と同様の結果が得られた。さらに、「身体の調子が悪かった」も「寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた (N=871, r=.309)」とやや弱い相関が認められた。

表3 惨事状況 (CIS) と PTSD 症状

CIS	×	PTSD 症状	
動揺し、ショックを受けた	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		***
	×繰り返し夢にみた		***
	×またおきたのではないかとびっくりした		***
	×思い出させる物で心が痛んだ		***
	×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した		***
	[回避と感情の麻痺]		
	×話題にすることを避けた		***
	×思い出させる出来事や場所を避けた		***
	[覚醒亢進]		
	×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた		**
	×気が散ってものごとに集中できなくなった		**
	×ちょっとしたことに用心深くなった		**
	×PTSD症状が現在でも残存している		***
精神的にとっても疲れた	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		***
	×繰り返し夢にみた		***
	×またおきたのではないかとびっくりした		***
	×思い出させる物で心が痛んだ		***
	×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した		***
	[回避と感情の麻痺]		
	×話題にすることを避けた		***
	×思い出させる出来事や場所を避けた		***
	[覚醒亢進]		
	×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた		***
	×ちょっとしたことでカッとなりイライラした		*
	×ちょっとしたことに用心深くなった		***
	×PTSD症状が現在でも残存している		***
自分のことのように感じた	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		****
	×繰り返し夢にみた		***
	×またおきたのではないかとびっくりした		***
	×思い出させる物で心が痛んだ		****
	×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した		***
	[回避と感情の麻痺]		
	×話題にすることを避けた		***
	×思い出させる出来事や場所を避けた		***
	[覚醒亢進]		
	×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた		***

	<ul style="list-style-type: none"> <li>×ものごとに集中できなくなった</li> <li>×ちょっとしたことに用心深くなった</li> <li>×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*</li> <li>***</li> <li>*</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>×PTSD症状が現在でも残存している</li> </ul>	***
<p>誰にも体験や気持ちを話せなかった 話しても仕方ないと思った</p>	<p>[再体験]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×繰り返し思い出された</li> <li>×繰り返し夢をみた</li> <li>×またおきたのではないかとびっくりした</li> <li>×思い出されるもので心が痛んだ</li> <li>×思いだすと胸がドキドキしたり緊張した</li> </ul> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×話題にすることを避けた</li> <li>×思い出される出来事や場所を避けた</li> <li>×思い出そうとしても思い出せない</li> <li>×趣味, 仕事, 任務に打ち込めなくなった</li> <li>×一人ぼっちになった感じがした</li> <li>×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</li> </ul> <p>[覚醒亢進]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた</li> <li>×ちょっとしたことでカッとなり, イライラした</li> <li>×ものごとに集中できなくなった</li> <li>×ちょっとしたことに用心深くなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>×PTSD症状が現在でも残存している</li> </ul>	***
<p>上司, 同僚・組織への怒り, 不信感 を抱いた</p>	<p>[再体験]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×繰り返し思い出された</li> <li>×繰り返し夢にみた</li> <li>×思い出させる物で心が痛んだ</li> <li>×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</li> </ul> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×話題にすることを避けた</li> <li>×思い出させる出来事や場所を避けた</li> <li>×一人ぼっちになった感じがした</li> <li>×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</li> <li>×将来のことを考えられなくなった</li> </ul> <p>[覚醒亢進]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた</li> <li>×ちょっとしたことでカッとなり, イライラした</li> <li>×ものごとに集中できなくなった</li> <li>×ちょっとしたことに用心深くなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>**</li> <li>**</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>**</li> <li>*</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>×PTSD症状が現在でも残存している</li> </ul>	***
<p>この仕事に就いたことを後悔し た</p>	<p>[再体験]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×繰り返し夢にみた</li> <li>×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</li> </ul> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>×話題にすることを避けた</li> <li>×一人ぼっちになった感じがした</li> <li>×嬉しい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</li> <li>×将来のことを考えられなくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*</li> <li>**</li> <li>**</li> <li>***</li> <li>***</li> <li>***</li> </ul>



	<p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×ちょっとしたことでカッとなり,イライラした ×ちょっとしたことに用心深くなった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*** ** * *</p>
やる気をなくし辞めようと思っ た	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し夢にみた ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×趣味,仕事;任務に打ち込めなくなった ×一人ぼっちになった感じがした ×うれしい気持ち,楽しい気持ちが少なくなった ×将来のことを考えられなくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×ちょっとしたことに用心深くなった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>* ** *** *** *** *** * * *</p>
投げやりになり皮肉になった	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×思い出させる出来事や場所を避けた ×思い出そうとしても思い出せない ×趣味,仕事,任務に打ち込めなくなった ×一人ぼっちになった感じがした ×うれしい気持ち,楽しい気持ちが少なくなった ×将来のことを考えられなくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×ちょっとしたことでカッとなり,イライラした ×ものごとに集中できなくなった ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*** *** *** ** *** *** *** *** *** *** *** *** *** *** *** *</p>
自分を責めた	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×話題にすることを避けた ×思い出させる出来事や場所を避けた</p>	<p>*** *** *** *** *** *** ***</p>

	<p>×趣味, 仕事, 任務に打ち込めなくなった</p> <p>×一人ぼっちになった感じがした</p> <p>×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた</p> <p>×ちょっとしたことでカッとなり, イライラした</p> <p>×ものごとに集中できなくなった</p> <p>×ちょっとしたことに用心深くなった</p> <p>×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p>
無力感を抱いた	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された</p> <p>×繰り返し夢にみた</p> <p>×またおきたのではないかとびっくりした</p> <p>×思い出させる物で心が痛んだ</p> <p>×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×話題にすることを避けた</p> <p>×思い出させる出来事や場所を避けた</p> <p>×思い出そうとしても思い出せない</p> <p>×趣味, 仕事, 任務に打ち込めなくなった</p> <p>×一人ぼっちになった感じがした</p> <p>×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた</p> <p>×ちょっとしたことでカッとなり, イライラした</p> <p>×ものごとに集中できなくなった</p> <p>×ちょっとしたことに用心深くなった</p> <p>×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>**</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>*</p> <p>***</p> <p>**</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p>
身体の調子が悪かった	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された</p> <p>×繰り返し夢にみた</p> <p>×またおきたのではないかとびっくりした</p> <p>×思い出させる物で心が痛んだ</p> <p>×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×話題にすることを避けた</p> <p>×思い出させる出来事や場所を避けた</p> <p>×趣味, 仕事, 任務に打ち込めなくなった</p> <p>×ひとりぼっちになった感じがした</p> <p>×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた</p> <p>×ちょっとしたことでカッとなり, イライラした</p> <p>×ものごとに集中できなくなった</p> <p>×ちょっとしたことに用心深くなった</p>	<p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p> <p>***</p>

×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった	***
×PTSD症状が現在でも残存している	***

注) \* : p<0.01、\*\* : p<0.001、\*\*\* : p<0.0001

<引用文献>

Bryant, R.A., Harvey, A.G. 1996 Posttraumatic stress reactions in volunteer fire fighters. *J. Traumatic Stress*, 9:51-62.

Everly, G.S., Flannery, Jr. P.B. & Mitchell, J.T., 2000 Critical incident stress management(CISM): A review of the literature, *Aggression and Violent Behavior*, 5, 23-40.

久留一郎 2004 PTSD: ポスト・トラウマティック・カウンセリング 駿河台出版社

伊藤昌夫 1999 惨事ストレスとその対策について 近代消防 37 (3) (通号451)

加藤寛 2001 6. 災害救援者 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイド

ラインに関する研究班 主任研究者 金吉晴 じほう  
松井豊 2005 惨事ストレスとは 松井豊編著 惨事ストレスへのケア プレーン出版

餅原尚子・久留一郎 2005 惨事ストレス (CIS), 外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する実態調査～惨事状況とストレスの関係に視点をあてて～ 日本心理臨床学会第24回大会 発表論文集

総務省消防庁 2003 「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方について (概要)」 月刊フェスク (259)

総務省消防庁消防課 2003 「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方～消防職員の現場活動に係るストレス対策研究科報告書～」 近代消防2003年6月号

Stress in Fire Fighters, Coastguard Officers, Policemen and Emergency Medical Rescuers: A Clinical Psychological approach (II)

～CIS and PTSD～

Disaster experiences have great influence on rescuers as well as direct victims. In line with what preceding research has made clear in foreign countries, the occurrence rate of post-traumatic stress reaction in Japanese rescuers is also very high. Rescuers involved in a disaster also suffer from the same stresses as victims in meeting with a disaster. Moreover, they are professional rescuers and take other kind of stresses. For example, they cannot avoid going to a disaster scene. They are subject to social expectation and have some strong professional sense, such as a duty or responsibility to live up to. There is also some atmosphere in an organization that means they cannot complain to or consult with anyone. If they are gagged, the matter must be worse.

The purpose of this treatise was to analyze the CIS (Critical Incident Stress) and PTSD (Post-traumatic Stress Disorder), in fire fighters, coastguard officers, policemen and emergency medical rescuers and to clarify the features of their stresses.

We sent out a questionnaire and received replies from 356 fire fighters 80 coastguard officers, 854 policemen and 200 emergency medical rescuers.

As for CIS, fire fighters and emergency medical rescuers are more likely to suffer from it than coastguard officers and policemen. As for PTSD, fire fighters and emergency medical rescuers are more likely to suffer from it than policemen.